

特249
808

3
4



始



特 100

808

田 勝 郎 述

「變質可變」二年史展望

「變質」像根の破壊の豫備實驗創行から
「精神分離症」像根破壊の實驗公行要請まで

精神衛生學會刊行

38

4

特 249
808



成田勝郎述

『變質可變』一年史展望

——「變質」像根破壊の豫備實驗創行から
「精神分離症」像根破壊の實驗公行要請まで——



精神衛生學會刊行

驗實一第「學道軌神精」

(驗實「變可質變」謂所)驗實ノ壞破根像「質變」

(行施月五年二十和昭)



I

b



I

a



I



I

I
 實驗着手直前(五月十二日於東大脳研究室)
 a.....立會者ニ毒舌ヲ浴ビセカク
 b.....立會者等ヲ嘲笑ス

I
 實驗着手後約二十四時間後(五月十三日於多摩少年院東京出張所)
 實驗完了時(五月十九日於東京府代用精神病院加命堂腦病院)

第一實驗ノ被實驗體ノ素描

年 齡

十三歲

遺 傳

實父變質者？（遊惰ニシテ家ヲ成サズ、爲メニ被實驗體少年ハ生後直チニ他家ニ養子ニヤラレタリ）

「變質」像トシテ目立ツ點

生來甚ダシク落付カズ、物ゴコロ付ク頃ヨリ人ヲ人トモ思ハザル風。長ズルニ連レ次第ニ人ヲ手古摺ラス。友達ハ誰彼ノ區別ナク苛メ、上長ニモ突ツカカリ、叱ラレルト嘲笑シ無遠慮ニ辛辣ナル毒舌ヲ吐ク。四圍ヨリ持テ餘サレタルモ、養父母ノ愛着ト受持教師ノ熱意ニヨリ十三歳マデ辛ウジテ抱ヘ居タルモノ。尙ホ、絶ヘズ爪ソノ他何カヲ嚙ム癖アリ。激シキ遺尿癖アリ。

附 記

本被實驗體少年ハ、十一歳頃某所ニ於テ「精神薄弱兒」ト診斷セラレ、又十三歳二月他ノ某所ニ於テ「異常兒」ト診斷セラレ。

本實驗着手直前東大脳研究室ニ於テハ「精神薄弱兒」又ハ「變質兒」或ハ「高度ナル病的な人格兒」ト診斷セラレ。實驗完了ト共ニ「變質」像ノ大部分ハ一齊ニ消滅シ「病識」類似ノモノ現ハレ一見全クノ普通兒ト見ユルニ至レ

リ。
尙ホ、爪ヲ嚙ム癖ソノ他ノ無意味ナル衝動々作モ「變質」像消滅ト同時ニ消滅セリ。但シ遺尿癖ハ殘コレリ。

立會

主ナル立會者左ノ如シ。

東大名譽教授同腦研究室主任三宅鑰一博士

元東京少年審判所長鈴木賀一郎氏

多摩少年院長小川恂藏氏

日本少年指導會長橋本勝太郎中將

「腦」主筆菊地甚一氏

尙ホ、此ノ種實驗ノ立會ハ、寫眞I IIニ示ス如ク、實驗着手直前・實驗中・實驗完了時ノ三回、少クトモI IIノ前後二回ニ亘リ被實驗體ノ像ヲ視較ベルニ非レバ立會ノ意味ヲ成サズ(特ニ研究的關心アル場合ハ別トシテ、單ニ立會ダケノ目的ノクメナラバ長時間視續ケルノ要ナシ、實驗前ノ状態ト實驗後ノ状態トヲ一目光視レバ十分ニ立會目的ヲ達スルモノナリ)

本被實驗體ハ實驗前後ヲ通ジテ百名近クノ人々カラ視ラレタレドモ、如上ノ意味ノ眞實ノ立會ヲ爲シタル人々ハ案外少ナク、前掲五氏ノ他ニ數氏ヲ數フルノミナリキ。

本實驗ニツキ、I IIノ時ヲ視テIIIノ時ヲ視ズ、Iノ時ヲ視ズシテI IIノ時ヲ視、又ハI IIノ何レカノ一斷片ダ

備考

ケヲ視ルガ如キハ「變質可變」ノ事實直視ヲ缺キ徒ラニ誤解誤傳ノ基ト成リ、思想轉換上却ツテ害アリ。

本被實驗體ハ、實驗打切後元ノ場所ニ戻シタルニ「變質」像(但シ實驗前ニ比シテ遙カニ淺表ナル像)再ビ現出シ、同時ニ爪ヲ嚙ム癖其他ノ衝動々作モ少シク再現セリ。斯クノ如ク「變質」ニ於テ「精神ヲ通ジテ出來上リ居ル」像ト「身體ヲ通ジテ出來上リ居ル」像トガ或範圍ソノ進退ヲ共ニスルコトヲ實驗的ニ證明シ得タルコトハ、此ノ種實驗研究ノ發展スベキ次ノ分野ニ重大ナル示唆ヲ與フルモノ、如シ。

又、本實驗ハ「或種ノ「變質」像ハ人爲ノ豫測内ニ於テ高速度ニ根本的消滅ニ致サレウルモノナリ」トノ證明トシテハ十分ナリ。然レドモ「變質」ニ對スル現代ノ思想・學理・實踐・機構・施設・常識等々ノ一切ハ、本實驗完了時ノ本被實驗體少年ノ如キ人間、即チ「變質」像根ヲ一舉ニ破壊セラレタルノ人間ヲ容レ之レニ連繫シテ直チニ「普通」像根ノ補顧的再建ニ致スニツキ必要ナル諸條件ニ悉ク缺ケ居ルコトハ言ヲ俟タズ。何故ナレバ「現代」ハ「變質」像根ノ人爲的破壊ト云フガ如キ事柄ヲ拔キニシテ出來上リ居レバナリ。

故ニ「現代」ニ於テハ、本被實驗體ハ本實驗ニ據リ極メテ高速度ニ「普通」像ニ一轉シウレドモ「普通人」トシテ通用スルニ至ラズ。而シテ此ノ事實ヲ根據トシテ「變質可變」實驗ヲバ恰モ不完全ナル「變質治療法」ノ如クニ評價セラル、コトアリ。蓋シ「變質可變」世ニ出デ始メタル過渡期時代トシテハ、コハ避ケ難キ誤解ナリ。

「精神軌道」第二實驗

「精神分離」之破壞像實驗

(昭和三十一年一月施行)

實驗1. 着手指直前ノ状態

(一九五一年八月於東京少年醫務院)



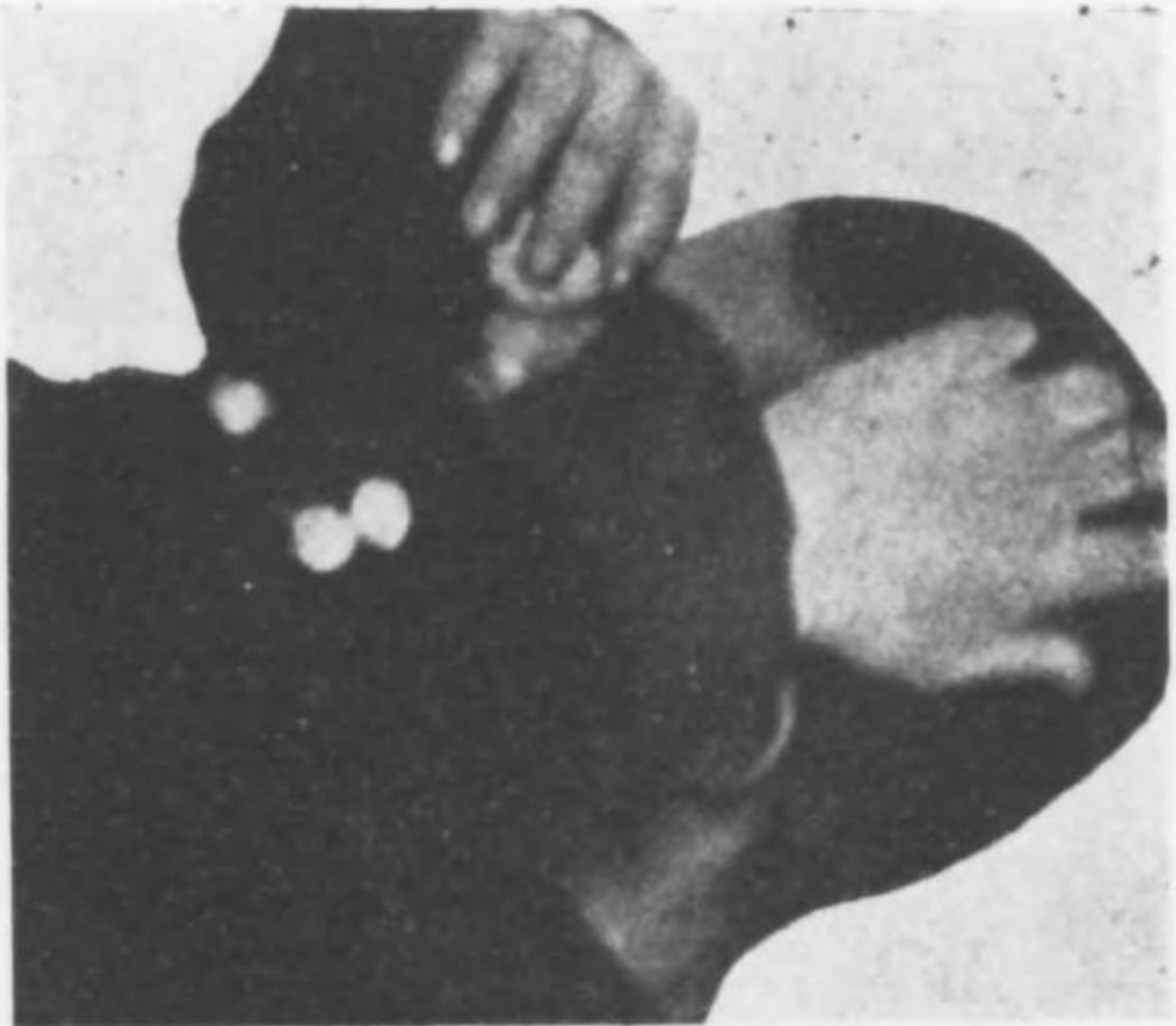
(a)

問診ノ途
切レニ獨
語空笑シ
居ル状態



(b)

問診ニ應
答シ居ル
トキノ狀
態(作嘴
癢ヲ尖ガ
ラシテ話
ス)



(c)

カタ
ナシレ

態 狀 ノ 中 作 操 斷 遮 戟 刺 . II
(所張出京東院年少摩多於日九及日八月一)



(a)
遮斷操作
五時開後



(b)
遮斷操作
二十三時
開後

時了完作操三第二第一第八注戟刺 Ⅲ



(c)



(b)



(a)

(ウタレラベ較見々夫トobaノI)

第二實驗ノ被實驗體ノ素描

年 齡

十六歲

遺 傳

父ノ兄精神分離症？ 本人ノ次兄現ニ精神分離症（某専門醫ニ診斷セラレタリト云フ）

「精神分離症」像トシテ目立ツ點

生來過敏ナレドモ所謂「シゾイド」像ヲ形成シ居ラザリシ如シ。

九歲頃、長兄（當時十五歲）ヨリ執拗ニカラカハレタルヲ契機トシテ不安状態トナリシモ、一ヶ月位ニテ自然ニ舊態ニ復セリ。

十三歲十二月頃、再ビ不安状態ヲ呈シ時ニ不眠アリ。當時中學一年ナリシガ出缺不定トナリ次第ニ自籠的トナル次イデ長兄ヨリ毒セラルトノ念慮ヲ生ジ漸次妄想化シ、長兄ト共ニ起居スルヲ怖レ自ラ一室ニ籠居シ内部ヨリ鍵ヲカケ長兄ノ入り得ザルヤウニシテ通學シ、以後同ジ屋根ノ下ニ住ミ乍ラ兄ト顔ヲ合ハスコトヲ絕對ニ避ケツ、暮ラス。此ノ頃ヨリ家庭内ノ食物ハ一切採ラズ（長兄ガ毒ヲ入レルト言フ、後ニハ女中モ長兄ノ命ニテ毒ヲ入レルト言フ）漸次家庭内デハ菓子果物モ採ラズ水モ採ラズ。三食ハ仕出屋物ヲ採リ又ハ父母ニ伴ハレテ附近ノ食堂ニテ採リ、水ハ飲マズ、飲ムトキハ附近小公園ニ行キテ飲ム。又家ノ風呂ニモ入ラズ（水道ニ毒ヲ入レテアルト

言フ) 後ニハ全ク風呂ニ入ラズ顔モ洗ハズ、此ノ頃ヨリ目籠傾向一層甚ダシク、自己居室ヲ内部ヨリ釘付ケトナシ家人一切入ルヲ拒ミ自分ハ窓ヨリ出入ス。通學セズ、外出モ少ナク、大抵ハ室内ニテ雜誌ナド讀ムモ、後ニハ全ク室内ニ無爲ニテ暮ラシ時ニ庭ニ出デ、纏ラナイ泥イヂリナドナス。時々不眠興奮シ窓ガラス戸障子ナドヲ壊ハスコトアリ。

獨語空笑現ハル。

以上ノ像ハ、略一ケ年餘ニシテ一進一退シツツモ進行的ニ出來上リ行キタルガ、終ニ家庭ニ居ルニ堪エズト言ヒ興奮不眠頻リナリシタメ、或時ハ母ト共ニN市ノ親戚方ニ寄寓シ或時ハ父ト共ニK市ニ住ミ轉々ス(父ハ之レヨリ先キ勤務上K市ニ別居シ居レリ) 遠キN市K市ニ在リテモ長兄ガ追ヒカケテ來ルラシト言ヒテ時々不安状態ヲ呈シ、又ハ人物誤認的ニ他人ヲ見テ「長兄ガ追ツテ來タ」ト言ヒ怖レ逃ゲルコトアレドモ、概シテ朗カナリ。然シ行動ハ、一般ニ甚ダシク纏リナク爲メニ親戚ニモ寄寓シ切レズ父ノ下ニモ置キ切レズ、十五歳四月、非公認某精神病学家方ニ預ケタルモ同十二月或事情ノ下ニ其處モ斷ハラレ、本人ノ置キ場ニ困リ十二月中ハ單身下宿サセナドシタリ。

尙ホ、以上ノ像ノ他ニ、首・手・足等ヲ痙攣的ニ振り唇ヲ作嘴擡擡様ニ尖ガラシテ話スナドノ像モ出來上リタリ

附 記

本被實驗體少年ノ家庭ハ相當ノ知識階級ニシテ、吾子ニ以上ノ「像」ガ出來上リ行クヤ父母ハ密カニ各著者ノ精神病學書ヲ繕キタルガ何レヲ見テモ「早發性癡呆↓遺傳ニヨリテ發生ス↓豫後不良」ト記載シアル條項ニ一致ス

立 會

ル點多キヲ知リタレドモ、敢テ専門家ノ門ヲ敲カズ、専門家ヨリ判然ト宣告ヲ受ケ片道入院ヲ言渡サル、コトヲ畏レタレバナリト云フ。殊ニ本被實驗體少年ノ次兄ガ之レト前後シテ肺炎カタルニ罹リ内科病院ニ長ク入院中精神病調ヲ來タシタルタメ、主治醫ノ勸メニヨリ専門家ノ來診ヲ受ケタルニ「精神分離症」ト診斷セラレタルアリ旁々本被實驗體少年モ専門家ノ診察ヲ乞フトキハ必ズヤ「精神分離症」ノ診斷ヲ下ダサル、ハ必定ト考ヘ、専門家ノ受診ヲ仲バセルダケ仲バシ、有ラユル犠牲ヲ拂ヒツ、抱ヘウル限り抱ヘ續ケ來タレリト云フ。然シ十五歳十二月ニ至ルヤ、其ノ置場所ニ終ニ行詰リタルタメ意ヲ決シテ某精神病院ノ門ヲ敲キタルニ、本人ハ早クモ入院セシメラル、ヤヲ察知シ玄關ニテ逃歸リ、斯クテ今日マデ専門家ノ診察ヲ受ケタル機會ナカリシト云フ

豫備實驗ナリシヲ以テ特定ノ立會者ナシ。只ダ、直接間接ニ實驗ニ關與セル數十氏中、數氏ハI II IIIヲ共ニ視タレドモ爾餘ノ諸氏ハ斷片的ニ視タルノミ。

備 考

「精神分離症」像根ノ破壊實驗ハ、理論上ハ刺戟注入操作ニ複雑ナル逐次的段階ヲ必要トスルモノナレドモ「現代」ノ裡ニ此ノ條件ヲ造リ出スコトハ頗ル至難ナリ。此ノ意味ニ於テ本實驗ハ前ノ實驗ニ比スレバ其ノ實行ハ原理ヲ距ルコト更ニ遠ク、之レガタメニIヨリIIヘノ變化速度ハ稍々遅ク且ツ變化路ノ動搖ヲ免レザリシモノナリ從ツテIノ時ノ像ハIIノ時ニ至リテモ一齊消滅ニ至ラズ、不揃ヘニチダハグニ消滅シ又多クノ殘像長ク消滅セズ但シ、所謂「病識」ハ實驗着手後九日ニシテ明カニ現出セリ。

此ノ豫備實驗ニ於テハ「精神分離症」像根ノ破壊ハ結局甚ダ不十分ナリキ。實驗打切後二ヶ月ヲ經テ家庭ニ戻シタル處、獨語空笑ハ一般的ニハ既ニ完全ニ消滅セル時ニ至リテモ長兄ト相對スル時ハ忽チ空笑獨語様動作再現出シ、斯クテ一見「精神分離症」ト診斷シ得ザル状態ニ復シ乍ラ終ニ家庭ニ入ルヲ得ザリキ。

然シ、此ノコトハ、所謂精神症狀ノ發生ニ關スル實驗的研究ノ進展スベキ次ノ分野ニ重大示唆ヲ與フルモノト思ハル。

因ミニ、本被實驗體少年ヲ「像」消滅後ノ處見ヲ根據トシテ「彼ハ眞ノ「精神分離症」ニ非ズシテ何か別ノモノデアリシナラン」ト余ノ診斷ヲ是正セラレタル専門家モアリシ。然シ余ガ問題トシツ、アル點ハ、「此ノ「像」ヲ手懸リトシテ如何ナル分類學的診斷ヲ下ダスヲ最モ妥當トスルカ？」ノ机上詮議ニ在ラズシテ、「此ノ「像」ハ、如何ナル臆説カラ導カル、如何ナル原理ニ基ク所ノ如何ナル實驗方法ニ據ルトキ、夫レヲ如何ナル速度ヲ以テ如何ナル深サニ於テ如何ナル順序ノ下ニ消滅シウルモノカ？」ヲ即物的ニ詮議スル所ニ在ルヤ論ヲ俟タズ。

「變質可變」一年史展望

——「變質」像根破壊の豫備實驗創行から
「精神分離症」像根破壊の實驗公行要請まで——

「變質可變」實驗が創行されて以來「變質可變實驗の公行に際して」と題する別冊パンフレットを今日世に出すまで約一ヶ年を経過した。顧みれば、この一ヶ年は、余に取つて言語に絶したる強行軍の一ヶ年ではあつたが、又、余と余の周囲との關係に急激なる一大變化を招來した一ヶ年でもあつた。題するに「變質可變」一年史展望」と名付け這般の経緯の外廓を叙し、以て別冊パンフレットの跋に代へるものである。

尙ほ余は別冊パンフレットの讀者に豫め次の一事を特に乞ふものである。即ち、
本年四月十三日東京日日新聞及報知新聞が豫告報道した通り、「變質可變」實驗は近く公行される豫定となつてゐる。

而して、公行實驗の成果は、何れは別冊パンフレットの讀者にも何等かの途によつて必ずや報道さ

れることと思はれる。そこで讀者よ、該公行實驗が成功を收めたと知つた時は別冊パンフレットの内容につき願くは精讀玩味を賜はれ——けれども、該公行實驗が失敗に歸したと知つた時は別冊パンフレットは本小冊子と共に願くは直ちに廢棄せられよ。

註曰。「變質可變」實驗なる事柄につきての新聞豫告報道は事實から非常に外づれてゐる。が、別冊パンフレット内容にも詳記してあるやうに「變質可變」實驗なる事柄は元來全く現代思想外の事柄に屬し、又この實驗から生ずる事實は今までの世の中には全く見られたことのない事實である。「變質可變」實驗から如何なる事實を生ずるかは現在の所では夫れを眼のあたり見た所の處女實驗立會者と余を合せて僅々數人に過ぎぬのである。實驗の事柄についてこの數人以外の第三者が話で聽いて報道するのでは、結局は現代思想内に居て今までの世の中に有る桁の事柄で報道される他ない限り、事柄に對する事實認識上の雑多なる誤差は實に免れぬ所である。但し、斯る事實認識上の誤差は、實驗から生ずる事實が多數の人々に眼のあたり見られることによつて忽ち一掃されることと思はれる。實に、この實驗は事實が理窟づけられたり價值づけられたりする前に、事實そのまゝが直視されそして眼のあたり見られたまゝが報道されることこそ先づ必要なのである。

所謂「變質可變」實驗とは、

「人の精神」の何處かに如何様にか出來上つてゐるらしい所の、所謂「變質」像につき、その土

臺と成つてゐるらしい何ものかをば定作用心的エネルギーの定組合せを用ひて人爲の豫測内に於て一舉に破壊して了へるか否か」

………を眼のあたり試して見る實驗である。

斯様な實驗の創行に漕ぎつけるまでには、實驗原理の理論的根據として、「人の精神」に關する有らゆる基本的法則につき兎も角も一貫的假説を一應組立てた上のことである。(前文中傍點を附してある事項は凡て眞否不明なのであるが、之等の不明事項を心的即物學的假説的に一貫として組立てて見たのである)

換言すれば、「變質可變」實驗とは、「實驗」といふ科學用語本來の意義通りに、「人の精神」に於ける未知事が九牛一毛でもよい、果して既知事に移せるか否か」を眼のあたり實際に試してみるといふ事柄である。

だから、「變質可變」實驗の仕事は古今東西を通じて未だ嘗つて無かつたことである。直言すれば、「變質可變」實驗とは現代思想内に居乍らでは絶對に通じ得ぬ事柄である。この意味に於て今次の公行實驗にして若しも十分に成功するならば、夫れは文化的意義ある實驗となるのである。

「變質可變」實驗の理論的根據を成す所の、「人の精神」への一貫的假説を余が如何にして如何様に組立てたか………その歴史は茲では觸れぬこととする。

又、今次の公行實驗成果は主として理論界の檢分吟味に供せられるのであるが、余が理論界に乞ふ所のものは、「變質可變」實驗の理論の檢分吟味ではないのである。余が理論界に乞ふ所のものは、この實驗から生ずる次の如き「事實そのもの」の嚴正果敢なる檢分吟味である。即ち、

「人の精神」の何處かに如何様にか出來上つてゐるらしい所の、所謂「變質」像につきその土臺と成つてゐるらしい何ものかが、本實驗によつて若しも適確に一舉に破壊されるならば、「變質」像そのものは驚くべき高速度の下に根本的に消滅する筈である。

そこで實際に豫測通りの（少くとも豫測に近い）結果が出るかどうか？

……といふ、實驗成果として出て來る事實そのままを即物的に檢分吟味して貰ひたいのである。

今日までには、次の如き事實、即ち、

「人の精神」の何處かに如何様にか出來上つてゐるらしい所の、「變質」像とていふやうな像の土臺と成つてゐるらしい何ものかが、人爲の豫測外に於ておのづと崩壊し、次いで直ちに之れに代つて、「普通」像乃至「優秀」像の土臺と成るらしい何ものかが、同じく人爲の豫測外に於ておのづと再生した……とてども假に臆測すれば臆測できるやうな

……左様な事實、即ち「人間更生」とても謂ふべき奇蹟的現象（「手古摺り者」がどうしたわけか「普通人」乃至「優秀人」に一變する現象）は、東西を通じて屢々見聞される所である。

けれども、「變質可變」實驗に見られるやうな、「變質」像が人爲の豫測内に於て急速に根本的に消滅させられる」といふ事柄は、古今東西未だ嘗つて見聞されぬ所である。

人爲の豫測外に於ておのづと顯現する所の「人間更生」現象は、謂はゞ「變質」像の根本的消滅」現象と「普通」像の根本的再現」現象とが一連を成してゐる……と假に臆測できる現象である。そして、「變質可變」實驗によつて人爲の豫測内に於て顯現される現象は、「人間更生」現象の前半現象たる「變質」像の根本的消滅」現象の範圍に該當するものである。従つて、「變質可變」實驗は、夫れ自體決して「人間更生の實演」ではあり得ない。然し乍ら、「變質可變」實驗によつて人爲的に顯現される所の「變質」像の根本的消滅」現象は、奇蹟として天然に顯現する所の「人間更生」現象中の前半現象に比すれば、その速度は比較を超えて高速度に運ばれるのである。

又、「變質可變」實驗の立會者が實驗成果を眼のあたりに見て驚駭する點は、被實驗體に於ける「人間變化」の實際的價值に在るのではなくて、「變質」像の根本的消滅」現象の餘りにも超スピードの進行速度に在るのである。即ち、「人間變化」の速度の點に於ては、「變質可變」實驗は、立會者に向つて實に「奇蹟以上」を見せるのである。（天然では三年で出て來るものが實驗では三日で出て來る）。その故でもあるか、「變質」への堂々整備せる如何なる机上論陣も、「變質可變」實驗成果の前ではピタリと終熄して了ふのである。「變質可變」實驗成果の力は、机上迫力ではなくて、整備されたる

百千の机上迫力集團をも一舉に四分五裂せしむるに足る所の粗朴なれども強烈なる一ケの即物迫力である。

「變質可變」實驗は如上の關係に在るので、この實驗が十分に成功されたからとて、夫れで、直ちに「變質治療法」が確立するわけに行かぬことは自明である。

然し乍ら「變質可變」實驗の成功は、一回實驗して一回成功したといふだけでも、「變質者がよく成つた」といふ單なる事後報告例の百千例を提出することに比すれば、夫れは桁違ひの根本的重大意義を持つてゐる。又、「變質可變」實驗が不完全に成功したといふことでさへも、「變質者が本當によく成つた」といふ輝かしい事後報告が爲されることに比すれば、夫れでも尙ほ桁違ひの根本的重大意義を持つてゐる。何故なら、前者は「現象をば人爲の豫測内に於て顯現させる」事柄に屬し、後者は「人爲の豫測外に於て顯現する現象をば單に見る」事柄に屬するからである。

換言すれば、「變質可變」實驗は、「人間」を被實驗體として「人の精神」を被實驗對象として爲される所の、根本的重大意義ある實驗に他ならぬのである。實にこの種の實驗は、現代思想内に於ては未だ嘗つて試みられも企てられもしなかつたのである——否、左様な實驗が實際に希求し続けられ實際に想到し続けられることさへ未だ嘗つて無かつたやうである。直言すれば、「人の精神」に關する左様

な事柄の一切は謎に封じ込めて夫れには全然觸れぬやうに出來上つてゐるらしい思想こそ、則ち「現代思想」に他ならぬのである。

その故でもあらうか、「變質可變」實驗の創行に漕ぎつけるために必要な一切の條件を取揃へる際には、現代思想に悉く逆らはねばならぬのであつた。夫れ故に、「變質可變」實驗は世に當然出づべくして出で得たのではない。現代思想外の力の一滴が現代思想内の力の十重二十重の絶對的制壓から幾年となく圍まれ続け乍らも、奇しくも驅逐されせず、吸収されせず次第に成長し、そして現代思想の厘毫瞬間の偶然の隙に乗じて滲み出でつ、今や一舉に迸り出たものであつた。

抑もこの實驗が創めて行はれたのは、昭和十二年四月のことであつた。その時の實驗は、現代思想の頑強にして完全なる制壓下でその厘毫の間隙内に於て強行されたものとしては、その成果は先づ成功の部ではあつたが、夫れは豫備實驗であつたので世に出さなかつたのである。

現代思想の眞只中に於て之れに悉く逆らふ所の「變質可變」實驗を實行することは、謂はば兵法を無視せる無謀の必死的挑戦ではあるけれども、この豫備實驗の成功の勢に乗じて、翌五月、現代思想の代表者數名立會の下に本格的實驗としての「變質可變」實驗が強行されたのであつた。衆頭寫眞第一圖はその時の被實驗體の變化を示したものである。名づけて「變質」像根破壊實驗」又は「精神

軌道學」第一實驗」と呼ぶ。

「變質」に關する現代思想は涯しなく尤大に集結せる實力集團ではあるが、全體力としては眞實の連繋性も統制性も一貫性もないもののやうである。「變質」なる概念は、結局は次のやうなものに過ぎなかつた。即ち常識語で「手古摺り者」とか「持て餘し者」とか「出來損ね者」などと呼ばれるやうな人間を對象として居乍らにして出來上つた所の既成精神病理學思想——左様な既成精神病理學思想内に於て同じく居乍らに造られた所の一ケの机上概念——左様な机上概念こそ既成の「變質」概念に他ならぬ。然るにこの既成精神病理學思想は、同一對象に關して出來上つてゐる所の既成心理學思想との間には何等の一貫性を持つてゐない。又、同一の「手古摺り者」を焦點として出來上つてゐる學理思想・教育思想・法律思想・人道主義思想等々の間には、何等の連繋性なきのみならず離合常ならざる攻略妥協が涯しなく繰返されてゐるやうである。更に、「手古摺り者」を焦點としての之等の指導的思想は、常識的思想をば本當に心服させて指導し得てゐるわけではないらしい。

寔に「變質」への現代思想の全體力は、譬へば排日抗日華やかなりし頃の中華民國の全體力にも似て、内部的には何等の連繋も統制も一貫もなくして、只だ單に現状維持の惰性の點に於てのみ一致し従つてその實力は積極的實力として強いのではなくて世にも奇異なる消極的實力として強いのであつた。

然るに、「變質可變」實驗の成果より生ずる實力は、積極的實力として強烈なのである——夫れは巻頭寫眞を見ても判るやうに、理窟や議論や見界や主義や信念などの持つ整備された力ではなくて、事實そのまゝが持つ所の粗朴素直なる力に過ぎぬけれども、夫れだけに、現代思想内に牢固として立て籠もりつつ「變質可變」實驗に終始立會つて見て夫れでも思想動搖に陥らざることは寧ろ非常に困難であるらしい。

「變質可變」實驗成果は左様な強烈なる即物迫力を持つてゐるのである。夫れ故にこそ、その處女實驗は現代思想の眞只中に於て而かも現代思想と悉く逆らひつつ決行されたのであつたが、そしてその即物迫力は現代思想の頑強なる有らゆる制壓と抵抗に逢着したのであつたが——夫等の一切に打克つて、「變質可變」實驗は昭和十二年六月終に世に第一步を踏み出すに至つたのである。この處女實驗決行の事實は、昭和十二年六月十日東京日日新聞東京版に於て報道された所であつて「變質可變」の字句も實は東日新聞の創作語である。實に、「變質可變」實驗が世に出で始めるためには、現代思想の根本的抵抗から一齊に開放されることを必要とするのであつたが、而かも現代思想の根本的抵抗の一齊開放は社會公器たる新聞紙の事實報道（事實の價值宣揚ではなくて）に依る他に途はあり得ぬのであつた。「變質可變」實驗に關する限り、事實そのまゝの報道こそ望ましいのである。事實の價值宣揚は現在の所では現代思想内に於て爲される他ない限り、實は却つて價值減却となつて了ふのである。

この事實報道を契機として、處女實驗立會者諸氏の非常なる正義によつて、同月十七日「變質可變」實驗創行の事實は最密接關係者數十名に公表される機會が作られたのであつたが、斯くして茲に「變質可變」實驗に對する現代思想の根本的抵抗だけは完全に一掃されたのである。

「變質可變」實驗に對する現代思想の根本的抵抗は「變質可變」實驗の理論を拒む」所などに在るのではない。「變質可變」實驗創行の事實が公表されて後間もなく、所謂理論家の中には、相互間には連繋性も統制性も一貫性もない所の既成机上理論の城些群に思ひ思ひに占據しつつ「變質可變」實驗の理論的根據にまで思ひ思ひに激しく肉迫された人々もあつた——けれども、之等の人々は、この實驗成果を眼のあたり見ず従つて夫れの持つ強烈なる即物迫力の體驗なき（つまり思想動搖の洗禮を經ぬ）人々であつた。「變質可變」實驗に對する現代思想の根本的抵抗は、實驗の理論的根據までに迫るところか、「左様な實驗を通じて或る一事を見たとの明確なる意識を拒まんとする所」に在るのである。「或る一事」とは下のやうなことである。即ち現代思想内に於ては「絶対に有り得ないことになつてゐる」所の、左様な出來事が頗る不手際乍らも人爲の豫測内に於て平氣で顯現されてゐる……といふ一事である。物理学以前の蒙昧時代の思想を保持するためには物理学實驗は「見てはならぬもの」又は「見ても忘れて了はねばならぬもの」であつたが、「變質」への現代思想を保持するためには、「變質可變」實驗は「見てはならぬもの」又は「見ても忘れて了はねばならぬもの」に他ならぬのである。

實に「變質可變」實驗は、「變質」に關して現代思想を織滅し之れに代ふるに新たなる思想を直ちに再建するに足る所の、絶大なる即物迫力を持つものではあるが、夫れだけに、現代思想をば一様に一旦は崩壞的動搖に陥れぬわけには行かぬのである。そして、現代思想の斯る危機を眞實に速やかに解決しうる唯一の途は、「變質可變」實驗を見たことの明確なる意識を拒む」ことではなくて、「變質可變」實驗を見たことを人類の最高意識に於て明確に意識することであつた。

實に「變質可變」實驗が世に出でうる途は現代思想内には絶対に在り得ぬのである。夫れは處女實驗立會者諸氏の人類の最高意識を通じてのみ世に出づる途を與へられたのであつた。又、「變質」像は、人爲の豫測内に於て之れを高速度に根本的に消滅することができ「ことを實證するに足る實驗が成功した……といふ、このことが人類的に何を意味するかは餘りにも自明である。

「變質可變」實驗世に出で始めて以來茲に約一年、現代思想の根本的制壓と根本的抵抗とは今や完全に突破したけれども、末節的制壓と長期抵抗とは依然として續けられてゐて、之れがためにこの實驗は今尙ほ圓滑に進展することができずにゐるのである。何故なら「變質可變」實驗は、現代思想内の仕事ではない。現代思想の根本的制壓乃至根本的抵抗が去つたとて、その末節的制壓乃至長期抵抗の下に於てはその一步の前進とても實に至難である。

この事實報道を契機として、處女實驗立會者諸氏の非常なる正義によつて、同月十七日「變質可變」實驗創行の事實は最密接關係者數十名に公表される機會が作られたのであつたが、斯くして茲に「變質可變」實驗に對する現代思想の根本的抵抗だけは完全に一掃されたのである。

「變質可變」實驗に對する現代思想の根本的抵抗は「變質可變」實驗の理論を拒む」所などに在るのではない。「變質可變」實驗創行の事實が公表されて後間もなく、所謂理論家の中には、相互間には連繋性も統制性も一貫性もない所の既成机上理論の城些群に思ひ思ひに占據しつつ「變質可變」實驗の理論的根據にまで思ひ思ひに激しく肉迫された人々もあつた——けれども、之等の人々は、この實驗成果を眼のあたり見ず従つて夫れの持つ強烈なる即物迫力の體驗なき（つまり思想動搖の洗禮を経ぬ）人々であつた。「變質可變」實驗に對する現代思想の根本的抵抗は、實驗の理論的根據までに迫るところか、「左様な實驗を通じて或る一事を見たとの明確なる意識を拒まんとする所」に在るのである。「或る一事」とは下のやうなことである。即ち現代思想内に於ては「絶対に有り得ないことになつてゐる」所の、左様な出來事が頗る不手際乍らも人爲の豫測内に於て平氣で顯現されてゐる……といふ一事である。物理学以前の蒙昧時代の思想を保持するためには物理学實驗は「見てはならぬもの」又は「見ても忘れて了はねばならぬもの」であつたが、「變質」への現代思想を保持するためには、「變質可變」實驗は「見てはならぬもの」又は「見ても忘れて了はねばならぬもの」に他ならぬのである。

實に「變質可變」實驗は、「變質」に關して現代思想を織滅し之れに代ふるに新たななる思想を直ちに再建するに足る所の、絶大なる即物迫力を持つものではあるが、夫れだけに、現代思想をば一様に一旦は崩壞的動搖に陥れぬわけには行かぬのである。そして、現代思想の斯る危機を眞實に速やかに解決しうる唯一の途は、「變質可變」實驗を見たことの明確なる意識を拒む」ことではなくて、「變質可變」實驗を見たことを人類の最高意識に於て明確に意識する」ことであつた。

實に「變質可變」實驗が世に出でうる途は現代思想内には絶對に在り得ぬのである。夫れは處女實驗立會者諸氏の人類の最高意識を通じてのみ世に出づる途を與へられたのであつた。又、「變質」像は、人爲の豫測内に於て之れを高速度に根本的に消滅することができぬことを實證するに足る實驗が成功した……といふ、このことが人類的に何を意味するかは餘りにも自明である。

「變質可變」實驗世に出で始めて以來茲に約一年、現代思想の根本的制壓と根本的抵抗とは今や完全に突破したけれども、末節的制壓と長期抵抗とは依然として續けられてゐて、之れがためにこの實驗は今尚ほ圓滑に進展することができずにゐるのである。何故なら「變質可變」實驗は、現代思想内の仕事ではない。現代思想の根本的制壓乃至根本的抵抗が去つたとしても、その末節的制壓乃至長期抵抗の下に於てはその一步の前進とても實に至難である。

併し、「變質可變」實驗は冒頭にも述べたやうに、茲一ヶ月以内に公行されることとなつた。そしてこの實驗が斯く公行に移されることができたのは、前回立會者諸氏の人類の最高意識に因るは素よりであるが、特に現東京少年審判所長石井謹爾氏及東大教授兼松澤病院長内村祐之氏の特に強烈なる人類の最高意識に負ふものである——兩氏は、「變質可變」實驗成果を直接にはまだ見られぬのであるがその事柄の人類の重大意義を察知されて實驗公行試行を敢て許されたのである。

けれども、不日行はれんとする公行實驗は、決して手軽く行はれるのではなく、「變質可變」實驗に對する現代思想の末節的制壓乃至長期抵抗ある中に於て行はれるのである。否、處女實驗創行の事實公表以來約一年、今尙ほ頑強に續けられつつある所の有らゆる末節的制壓乃至長期抵抗の一切を先づ一舉に解決せんがために、敢てその真只中に於て公行實驗が強行されるのである——公行實驗とは、實驗中余が被實驗體に直接に觸れぬ代りに凡ての實驗關與者に實驗原理を絶対に守つて貰ふことを條件として行はれる實驗を謂ふのである。

「變質可變」實驗は人類の重大價值ある事柄であつて、夫れを手懸りとして新方向が進められることは人類の希求に於ては焦眉の急を告げてゐるのである。けれどもこの新方向が眞實に始まるためには現代思想の末節的制壓乃至長期抵抗が十分に掃蕩されることを先づ必要とするのである。

今次の實驗公行の意義は以上の點にあるのである。が夫れは尙ほ下の如きより、重大意義をも含んで

ゐるのである。即ち、それはバンフレット本文に詳細に記してあるやうに、「變質可變」實驗が公行形式に於ても尙ほ且つ成功するか否かは、「人の精神」への即物學が芽生えうるか否かの運命を決定し、延いて「人の精神」への即物文化が建設されうるか否かの將來性をも決定するのである。余が「精神軌道學」と假稱する所のものは、心的即物學系列に屬する一體系に他ならぬのである。又余の謂ふ新たな少年保護や新たな精神病治療とは心的即物文化の一つである。

「精神軌道學」が新生即物學として確かに芽生え確かに根下ろすためには、少くとも次の三通りの實驗が何れも成功されることを先づ必要とするのである。

1 「變質」像を根本的に消滅する實驗（但し腦髓病を伴はぬ種類のものに限る）……之れを「精神軌道學」第一實驗と假稱する。

2 「精神病」像を根本的に消滅する實驗（但書同前）……之れを「精神軌道學」第二實驗と假稱する。

3 「精神薄弱」像を根本的に消滅する實驗（但書同前）……之れを「精神軌道學」第三實驗と假稱する。

注意。現實の生きた人間を視て「變質」・「精神病」・「精神薄弱」などの診断を下す際には、腦髓症狀の手懸りなくして（言ふまでもなく腦髓剖檢處見なくして）只單に「精神」像上のものであつた唯一の手懸りとして診断を行はねばならぬ場合が少くはない。換言すれば、「精神變質」・「精神病」・「精神薄弱の本態は腦髓に在り……との現代の生物學的信條は、凡てが必ずしも即物檢證を経る可能性を持つ」わけではない。「變質」・「精神病」・「精神薄弱」と謂はれてゐる「精神」像群の中には、單に「生物學思想の中」とか「既成精神病學者の頭の中」とか「既成精神病學教科書の中」などに於ける非即物檢證こそを十二分に經てはゐる。けれども、眞實に腦髓即物檢證を経る途が永遠に在り得ぬ種類のものも混在するのである。「精神軌道學」は斯る範圍の「變質」・「精神病」・「精神薄弱」の本態をば一應は心的即物檢證に求めて見るために組立てられた所の、心的即物理論體系に他ならぬのである。

處女實驗として立會的に行はれた「變質可變」實驗も今次公行的に行はれんとする「變質可變」實驗も、歸する所、「精神軌道學」第一實驗の僅かに一種にすぎぬのである。

余は昭和十二年五月、「精神軌道學」第一實驗に成功するや引續き「精神軌道學」第二實驗の創行機會を狙つてゐたが、幸にその機を得たのであつた。そして、昭和十三年一月「精神分離症」像をば人爲の豫測内に於て高速度に根本的に消滅する實驗の豫備實驗にも終に成功したのである。（卷四寫眞參照）

當初の豫定では、今次の公行實驗は「變質可變」實驗即ち「變質」像根破壊實驗に限るつもりであつたが、本パンフレットの發行直前に豫定を變更して「精神分離症」像根破壊實驗をも同時に公行に上せることとした。そして、この二様の公行實驗にして幸に十分の成功を収めた曉には、余は直ちに「精神軌道學」第三實驗即ち、

「精神薄弱」像根破壊實驗の豫備實驗の創行に取掛る豫定である。

因に、「精神軌道學」の理論は現代までの机上學の理論に比すれば桁違ひの廣汎性發展性を持つものではあるが、現在の所ではその内容は未だ頗る粗朴亂雜である。余は數年以前より「精神軌道學」の大綱的組立の僅少一部を雜誌「腦」に連載中であるが、之れに對する今日までの一般批判は「難解」の一語に盡きてゐるやうである。

けれども、「精神軌道學」のむづかしさは、決して理論的難解に在るのではなくて實に思想的難解に在るのである。——夫れは、譬へばその昔形而上學思想内に居乍ら物理學理論を理解せんとするにも似たむづかしさである。夫れ故に、「人の精神」への一切の机上學思想から一應離れて「精神軌道學」の理論を聴き且つ之れより生ずる實驗成果を見るときは矛盾撞着なき一貫的理論たることが容易に判るのである。

「變質」像根破壊實驗と「精神分離症」像根破壊實驗と「精神薄弱」像根破壊實驗とは、實驗原理を稍々異にし實驗操作は相當に違つて來るけれども、その理論的根據は何れも「精神軌道學」内に於て互に關連してゐるものである。

又「人間に於ける「變質」像や「精神分離症」像や「精神薄弱」像をば人爲の豫測内に於て高速度

に根本的に消滅させることができる」といふ理論的根據は、同時に「普通」像に在る人間に於て「變質」像でも「精神分裂症」像でも「精神薄弱」像でも人為的の豫測内に於て高速度に根本的に建造することができるといふ理論的根據と相關連してゐるのである。前者は謂はば治患的實驗に該當し後者は謂はば罹患的實驗に該當するのであるが、治患的實驗の事實上の成功は罹患的實驗の理論上の成立可能を経ずしては決して達せられぬ所である。

而して「變質」像や「精神分裂症」像や「精神薄弱」像を人為的に造り上げることができるといふことは、直接には應用上の價値はないけれども、次の如き根本的重大性ある理論上の價値を持つのである。即ち

變質・精神分裂症・精神薄弱などを對象としての遺傳記述部門と病理探究部門とは相互關係ありと雖も各々獨自に發達可能である。只だ、「人の精神」の即物理論に全く缺けたる蒙昧時代に於ては、遺傳記述部門が爾餘の一切の部門を吸収して茲に即物的なる「遺傳記述」の代りに非即物的なる「遺傳説」を生ずることを免れぬのであつた。然るに、變質・精神分裂症・精神薄弱などの像を「人の精神」に人為的に造り上げうる理論が成立可能となれば、茲に「人の精神」への即物病理探究部門の獨立が可能となる……といふ一事である。手つ取り早く謂へば、遺傳事實なき（或は遺傳事實が見當らぬ）人間にでも所望とあれば所定型の「精神異常」像所定期間内に十分

に造り上げてやれる。

……といふ話なのである。又、此の理論上の可能を経ずしては、「變質可變」實驗は決して具現し得ぬのである。

醫學蒙昧時代に於ては、遺傳記述部門が爾餘の一切を吸収し非即物理論たる「遺傳説」を生じ、而かもこの「遺傳説」こそが醫學自體の前進を阻んでゐたことは、肉體醫學が既に經驗した所である。又「遺傳説」を一舉に潰滅しうるものは、より尤もらしく聞こえる別派の非即物理論ではなくて、實に一ヶの「人工罹患實驗の成立可能」であることも、亦た肉體醫學が既に經驗した所である。

× × ×
 精神病学の發達を長く停滞せしめ精神病問題解決を長く多難に喘がしめて來た所のもは、「精神病学の遺傳事實」そのものではなくて、實に「遺傳説」と「遺傳説や環境説やその他雑多なる非即物理論を生む所の蒙昧時代の精神病思想」に他ならぬのであつた。

× × ×
 轉近の「遺傳説」は、昔日に比すれば次第に緩和されては來た。けれども、このことは精神病学の發達・精神病思想の進歩を語るものではなくて、實に却つて精神病学の軟化・精神病思想の混亂を語るものである。

精神病学の軟化乃至精神病思想の混亂は今から二十年前余が精神病学に第一歩を踏み入れた頃から

既に兆し、爾來夫れは進展の一路を辿つてゐたやうである。けれども、國家平和時に於ては夫れはさほど目立ぬ故でもあるか、精神病學の軟化・精神病思想の混亂が抑も何を意味し何を招來するかに關しては、學問上思想上の眞劍なる問題として未だ嘗つて上されたことはない。

然るに、今次支那事變を契機として吾國は未曾有の非常時に際會したが、斯る未曾有の國家非常時の脚光に曝されるや、精神病學の軟化・精神病思想の混亂は今や頓に擴大せられ、現下吾國の精神病學界及精神病思想界は未曾有の難局に直面して了つてゐるのである。

余は精神病學界に直接の責任なき一野人に過ぎずと雖も、精神病學徒の一人として國民の一人として吾國精神病學界及精神病思想界に於ける現下の重大危機を坐視するに忍びず、「遺傳説」その他精神病に關する一切の非即物理論の不當なる指導權と戰ふべく、敢て「精神病分離症」像根破壊實驗」をも公行に上さんとするものである。

「精神病分離症」像根破壊實驗は「變質」像根破壊實驗に比すれば、その成功はより、複雑なる條件を必要とし、「變質可變」實驗への現在の末節的制壓及長期抵抗の眞只中に於て行ふ限り、實驗の全經過を通じて到る處に失敗條件が伏せられてゐる。而かも余の提出する實驗は現在の所では全現代思想への挑戦の形式に於て爲される限り、實驗にして失敗に歸せんか、失敗理由の何たるかを問はず、失敗責任は擧げて余の一身に歸せらるべきであり、余は直ちに再び地下深く埋もるべきであり、従つて現代

思想に向つて何かを語る資格を終生失ふべきである。

昨年五月「變質可變」實驗の處女實驗の決行に當つては、余は余の人生を賭けたのであつた。そして、夫れの成功後多難なる一ヶ年を経過せる今日、「精神病分離症」像根破壊實驗の公行に當つて、復たもや余は余の人生を敢て再び賭けるものである。そして、余の人生を賭けた公行實驗が縦んば不幸失敗に歸し「變質可變」と共に破滅に了つたとしても余は敢て悔ゆる所はない。余の小るな人生が精神病學界乃至精神病思想界に於ける現下重大危機の解決のための捨石ともなり得なば余の本懐とする所である。

昭和十三年四月二十八日印刷
昭和十三年五月一日發行

〔非賣品〕

著
作
人

成 田 勝 郎

發
行
人

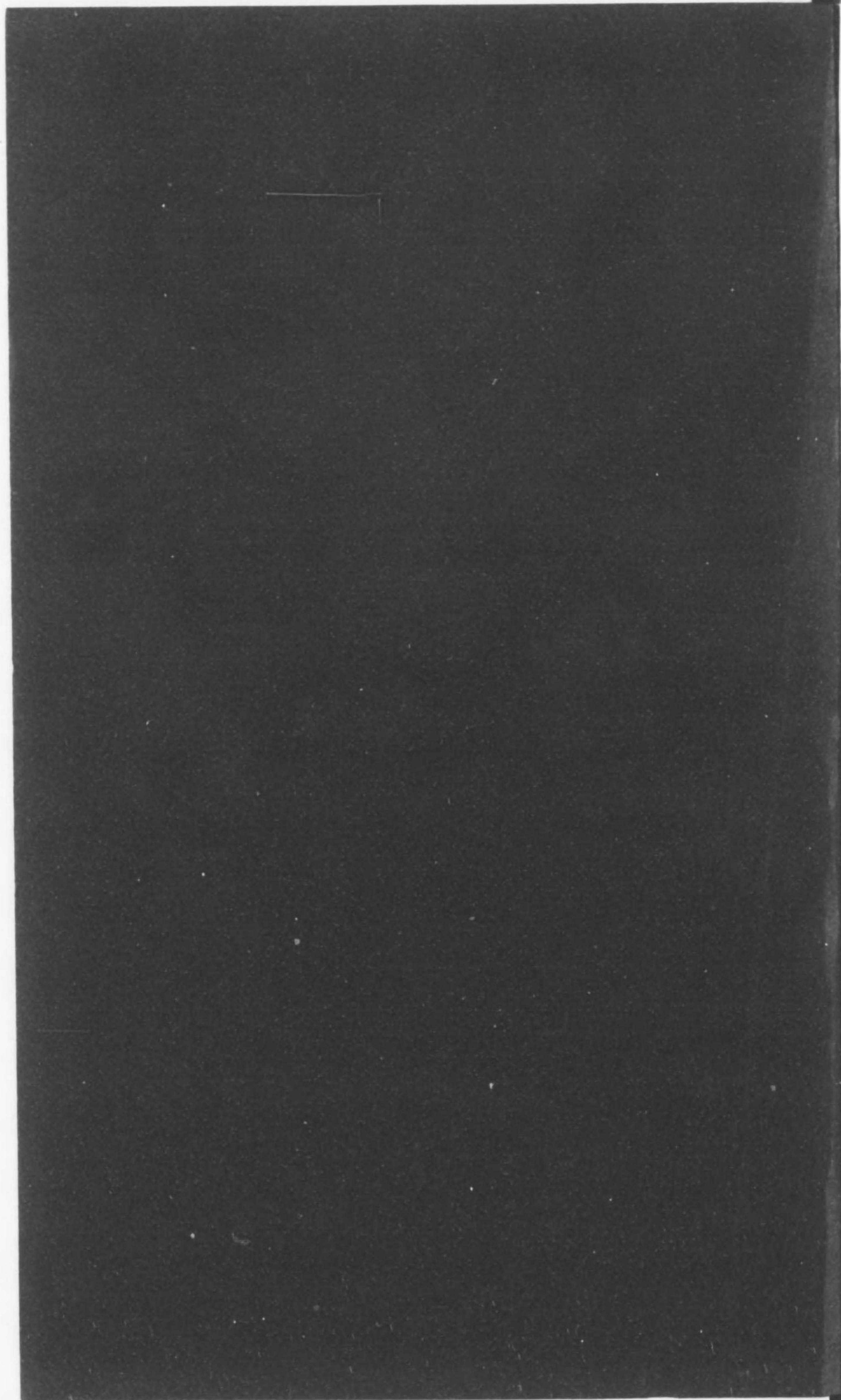
東京市小石川區大塚窪町十八番地
菊 地 甚 一

印
刷
人

東京市小石川區關口町六五番地
精 文 社 印 刷 所
電話牛込(4)五四一九番
振替東京四八五四二番

發
行
所

東京市小石川區大塚窪町一八番地
精 神 衛 生 學 會
電話大塚(6)五四一二番
振替東京六五四六五番



終

